

第906回オーチャード定期演奏会

終演予定17:40

5.6(日)15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第907回サントリー定期シリーズ

終演予定21:40

5.8(火)19:00開演 サントリーホール

第117回東京オペラシティ定期シリーズ

終演予定21:40

5.10(木)19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

指揮: チョン・ミョンフン

フロレスタン(テノール): ベーター・ザイフェルト

囚人1(テノール): 馬場 崇*

レオノーレ(ソプラノ): マヌエラ・ウール

囚人2(バス): 高田智士*

ドン・フェルナンド(バリトン): 小森輝彦

合唱: 東京オペラシンガーズ* (合唱指揮: 田中祐子)

ドン・ピツァロ(バス): ルカ・ピサロニ

お話: 篠井英介 / お話素案: 小宮正安

ロッコ(バス): フランツ・ヨーゼフ・ゼーリヒ

コンサートマスター: 近藤 薫

マルツェリーネ(ソプラノ): シルヴィア・シュヴァルツ

字幕: 小宮正安

ヤキーノ(テノール): 大槻孝志

字幕操作: 藤原彩加 Zimaku プラス)

5/6

5/8

5/10

May 6

May 8

May 10

東京フィルだより

ベートーヴェン:

歌劇『フィデリオ』(演奏会形式: 全2幕・ドイツ語上演・字幕付)(約130分)

第1幕 (約72分)

- 「さあ これで2人きり」
- 「ああ 彼と一緒にあって」
- 「ああ とってもうれしいわ」
- 「よし 勇気を忘れるな」
- 行進曲
- 「よし 今こそチャンスだ」
- 「人でなし! どこへ行く気?」
- 「ああ 何でうれしい」
- 「どうなりました?」~「パパ 急いで!」~「貴様 この野郎!」

一 休憩 (約15分)

第2幕 (約57分)

- 「おお なんといい聞だ ここは!」
- 「何で冷たい この地下の世界は!」
- 「さあ掘るぞ どんどん掘るぞ」
- 「お2人の親切が報われますように」
- 「野郎 死ぬ!」
- 「ああ 何でうれしい!」
- 最終場への場面転換
- 「嬉しい! やった!」~「お助けください!」~「ああ 神様...」
- 「素晴らしい伴侶を得た者は」

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

共催: 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団(5/10)

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)/

公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団(5/8)

協力: Bunkamura(5/6)



文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

マエストロ・チョン・ミョンフンからのメッセージ ベートーヴェン『フィデリオ』によせて

「オペラの中には、音楽を主体とした演奏会形式で上演する方が良い作品がいくつかあります。ベートーヴェンの『フィデリオ』は、色々な意味でその最高の例のひとつです。この作品の演奏は、大きなチャレンジであり、意義深いチャレンジでもあります。また、人間としての強いメッセージがそこにあるという意味では、「第九」交響曲にも似ています。



©ヴィヴァーチェ

『フィデリオ』の深遠な音楽の魂はすべて、『レオノーレ』序曲第3番に集約されています。ですから今回は、『フィデリオ』序曲ではなく、その前にベートーヴェンが作曲していた『レオノーレ』序曲の第3番に立ち返ろうと思っています。最終的に採用された『フィデリオ』序曲は、第1幕前半の軽い部分に合っています。しかし特にコンサートの場合は、最高の音楽を演奏したい。それに通常の上演では第2幕のフィナーレの前にしばしば『レオノーレ』序曲が挿入されますが、私にはその意味がわかりません。まず全体の核心が込められた『レオノーレ』序曲があって、軽い曲が続いた後、本当のドラマに入っていく。そして第2幕のプロレスタンのアリアが始まると、『レオノーレ』序曲に込められていたものがわかる……といった流れが正しいと考えています。

『フィデリオ』は音楽的な充足感をもたらす作品であり、全体のフィナーレはもちろん、第1幕の短くも美しい二重唱、レオノーレのアリア、囚人たちの合唱、オーケストラの導入を含めて本作の中で最もドラマティックな第2幕のプロレスタンのアリアなど、聴きどころが多々あります。

しかし、ベートーヴェンを語るのには、人間としての真実は何かを語ることであり、話すのは容易ではありません。ただ東京フィルと私は、長い間に何回もベートーヴェンの作品を取り上げてきました。聴衆の皆様が、それを反映した今回の演奏から何らかのスピリットを聞き取ってくださると嬉しく思います」。

(ききて: 柴田克彦)

『フィデリオ』の物語

ある日、スペインのとある町の刑務所に、働き者の青年がやってきます。その名もフィデリオ。真面目に働く彼を人々は気に入り、婿にしようとする者まで現れます。ところが、フィデリオには大きな秘密がありました。実の姿は囚われの夫を救出するため男装し、刑務所に潜入して救出のチャンスを狙う女性、レオノーレだったのです。

愛する夫を救うため、
自らの身の危険もかえりみず
悪と戦った勇敢な妻、レオノーレ。

互いを信じ、思いやる夫婦の愛が理不尽な悪を倒し、
人々に自由をもたらしました。
物語の結末で歌われる歓喜の合唱は、
ベートーヴェンからすべての人々に贈られた愛と勇気のメッセージなのです。



歌劇『フィデリオ』第2幕。囚われの夫フロレスタン(右)を護るべく、刑務所長ピツァロ(左)の前に立ちちはだかるレオノーレ(中央)。テアトルリリックにおける上演風景。1860年。

レオノーレがフロレスタンの鎖を解く場面では、若き日のベートーヴェンが、尊敬する啓蒙君主ヨーゼフ2世(1741-1790)の死を悼んで書いた声楽曲『皇帝ヨーゼフ2世の葬送カンタータ』の一部の旋律が用いられている。『フィデリオ』ではまずその旋律がオーボエに与えられた後、徐々に登場人物たちに受け渡され、その場にいる人全員...そこには恋に破れたマルツェリーネも含まれる...の間に湧き上がる感動の念を静かに高めてゆく。ここに、身分上の貴族というのみならず、精神の貴族でもあるレオノーレ、フロレスタン、そしてフェルナンドは、ヨーゼフ2世のごとく彼らのよき指導者として、希望の光射す未来を築き上げてゆく存在となったのである。

そして最後は、歓喜が爆発するフィナーレ(『素晴らしい伴侶を得た者は一緒に歓びの声をあげよう!』)。レオノーレの勇敢な行動はもちろんのこと、彼女の揺るがぬ愛情が、力強い合唱を主体に高らかに讃美される。オーケストラによって繰り返されるのは、勝利を表すハ長調に乗って、『レオノーレ』序曲第3番にも出てきた「タタータ」という自由を象徴するリズム。ここに、とある夫婦の愛と救出の物語は、自由という普遍的なテーマの物語へと昇華したのだった。

[原作] ジャン・ニコラス・ブイ『レオノーレ、または夫婦愛』

[台本] ヨーゼフ・フォン・ライトナー、フリードリヒ・ライチュケ

[作曲年代] 『レオノーレ』(第1稿) 1804~1805年 / 『レオノーレ』(第2稿) 1806年 / 『フィデリオ』 1814年

[初演] 『レオノーレ』(第1稿) 1805年11月20日アン・デア・ウィーン劇場にて / 『レオノーレ』(第2稿) 1806年3月29日アン・デア・ウィーン劇場にて / 『フィデリオ』 1814年5月23日ケルントナートーア劇場にて

[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2(『レオノーレ』序曲第3番ではトロンボーン3)、ティンパニ、弦楽5部 / バンダ(舞台裏):トランペット

こみや まさやす / ヨーロッパ文化史研究者。横浜国立大学教授。著書に『コンスタンツェ・モーツァルト<悪妻>伝説の虚実』(講談社選書メチエ)、『名曲誕生 時代が生んだクラシック音楽』(山川出版社)等多数。日生劇場『フィデリオ』ドラマトゥルグ、『東京・春・音楽祭』でのナビゲーター、テレビやラジオへの出演など幅広い分野で活躍している。